

研究の現場から

共同研究

『皇室野史』の再発見

伝統文化研究プロジェクトリーダー

橋本 富太郎

成果は『モラロジー研究』に寄稿

本共同研究は、モラロジーにおける国家  
伝統研究の一環として、廣池千九郎著『皇  
室野史』（明治二十六年）を読み解き、注釈を  
つけて読みやすくすることを目的として令  
和三年にスタートしました。明治二十年代  
の史学の興隆を視野に入れ、京都という土  
地柄の特色も捉えつつ、当時の廣池博士の



研究および啓蒙活動を明らかにすることに  
より、本書はモラロジーの形成史に意味を  
増し、その史学史上における位置も明らか  
になると考えております。

注釈は、難語、人物、史料等に分け、そ  
れぞれに担当者を割り当てて付していきま  
す。使用された史料には特に注意し、富岡  
鉄斎の蔵書などの調査も重視しています。  
得られた成果は段階的に『モラロジー研  
究』に寄稿する予定で、すでに一回分が第  
八九号に掲載されました。

大義名分と先進的な研究

ここではその要点を述べたいと思いま  
す。

本書の広告によると、当時、皇室に関す  
る実証的な文献は存在せず、特に武家政権  
時代の皇室の実状については知る人が誰も  
いないとのことでした。そんな中、本書は、

応仁の乱から江戸末期までの皇室がもつと  
も衰退した時期に、武将たちが皇室に対し  
ていかなる態度をとったか、また、皇室と  
人民とのつながりがいかに深く、苦楽を共  
にしていたかを論じています。

このように本書は、皇室の歴史を通史的  
に辿るのではなく、そのもっとも苦難の時  
代にスポットを当てていることに最大の特  
色があります。なぜそうなったのかという  
と、苦難の時代だからこそ、真の大義名分  
が明らかになるからです。つまり、自ら犠  
牲を払ってでも皇室を支えようという真心  
があるか無いかは、苦しい時代になってみ  
ないと分からないということです。さらに、  
こうした至誠の人々を顕彰することによ  
り、おのずから皇室を尊重すべき理由が理  
解されるとしています。

本書で示されたこのような姿勢は、実証  
的な研究により人々を道徳実行へと導こう  
とする、廣池博士の生涯に一貫した研究態  
度といえるでしょう。

また、本書の観点は研究史上において極  
めて先進的なものであったと見ることがで  
きます。皇室と武家との関係に関する研究  
は、平成に入ってからようやく盛んに扱わ  
れるようになってきました。本書はそれよ  
りも百年も進んでいたのです。